

仮想対談

2030年の考古学者は語る

「一九九〇年代の発掘調査が残した光と影」

急増した発掘調査

聞き手・今日は、島根県の考古学分野で大活躍をされている先生にお願い、一九九〇年代の発掘調査が残した光と影」について語っていただきます。早速ですが先生、昨年の報告によれば荒神谷の銅剣の謎も明らかになり、ついに島根の古代も全容が見えてきたようですね。それにしても四〇年前の発掘調査のときには、なぜか新しいことがわからなかったのでしょうか。一九九〇年代の発掘調査を振り返ってみてください。

考古学者・一九九〇年代、つまり今から四〇年前と言えば、ちょうど安来や松江、浜田で高速道路が建設され始めたころです。島根県全体で言うと、道路やダムなどの建設に伴って、事前的発掘調査が急増したころでした。



遺物などが出はじめると細かく掘っていく。

豊富なデータと遺跡保存の動き

聞き手・では当時の膨大な発掘調査は、何の役に立ったのでしょうか。今回のテーマである「光と影」の「光」の部分について語ってください。

考古学者・そりゃあなんと語っても、調査によって得られたデータの豊富さです。この膨大なデータを今日整理したものと、近年の調査によって新たにわかったことを合わせることで、島根の歴史は解明され、日本の古代史も解明がされたのです。「なぜ荒神谷から三五八本の銅剣が出たか」や「邪馬台国がどこにあったのか」などが、四〇年前にはわからなかったのですから、今から考えると当時の考古学は謎だらけだったのです。それが解決したのも、今までのデータの蓄積によるものですから、それを忘れてはいけません。とはいえ、現在ではまた新たな謎が出てきましたけどね。

聞き手・そのころの記録というのが、大変役に立っているんですね。

考古学者・そのころの記録は、考古学の分野以外でも役に立っています。

聞き手・どういふことですか？

考古学者・三〇年前に比べると、今の景観と言いますか眺めと言いますか、山や川など自然の様子も変わっていますよね。三〇年前の自然の記録も、発掘調査の記録によって残っています。現在の住宅団地やレジャーランドになる前の山の形や、川の様子、植生の様子なども写真や図面に残されているんですよ。

聞き手・へー、そうなんですか。

考古学者・「光」にはもう一つ重要なことがあります。今でこそ、われわれは文化的に貴重なものを保護して活用するようになっていますが、「このような動きが活発になってきたのも、一九九〇年代」からでした。人びとが文化財を歴史的遺産として考え始め、積極的に「保存」「活用」するようになったのです。二一世紀の今も縄文時代や古墳時

このころ一〇年間で、発掘調査件数は五倍にもふくれ上がったのです。当時「ハイテク機器」などと呼ばれたコンピュータを導入したりして、急増した調査に対応していました。

手作業で調べる

聞き手・一九九〇年代の発掘調査はどのように行われていたのか、調査の様子を語ってください。

考古学者・今の人には想像できないかもしれませんが、当時、遺跡は「掘って見なければわからない」というものでした。パワーシャベルなどを使うこともありませんでしたが、ほとんどは作業員さんが手作業で丹念に地面をはぎ、土器などの遺物や遺構を見つけるしかなかったのです。掘り始めてから、高速道路の予定地の中に重要な遺跡



人力による荒掘作業

コンピューターを使った測量は、当時最先端技術だった。



があることがわかったこともあり、発掘された遺跡の多くは、写真を撮ったり、図面に残して記録されたあと壊されたわけですが、現在も残っているような重要な遺跡については、壊さずに「保存」されました。

聞き手・すると当時の発掘調査というのは、今のようにコンピューターによる地質解析や地上からの透視によって遺跡を見つけないで、まったくの手作業による、本当の「発掘」だったわけですね。

考古学者・もちろん今でも手作業はありますが、現在は発掘技術も進歩し、いちいち山全体を掘り返さなくても遺跡を見つけることができます。高速道路にしても昔のように山を削って作るのではなく、地下を通すなどの工夫をして、遺跡にぶつかることも少なくなりました。三〇年前から比べると、大変な進歩と言えるでしょう。

代の様子を見たり体験できるのもそのおかげなのです。

聞き手・私も先日体験しましたが、島根県歴史公園内の「縄文館」では、まさに縄文時代にタイムスリップし、縄文時代の村でキャンプ体験をしたかのように感じました。それは一九九〇年代の発掘調査の問題点と言いますか「影」の部分って何でしょうか。

壊してしまった遺跡

考古学者・そのころは、私もまだ現役で発掘をしていたので、なかなか言いにくいところもあるのですが……。さっきも申しましたように、当時は「掘って見なければわからない」時代でした。そのため、調査によって大事な遺跡が壊れてしまったり、いま思えばもう少し詳しい記録が必要だったというところも、緊急な調査のため記録不足になったこともあり、記録は報告書といった形でまとめたわけですが、コンピューターによるデータベース化も始まったばかりでしたから、情報の交換なども手間取っていたのです。

聞き手・今なら壊さずに保存できた遺跡もあったでしょうね。

考古学者・今は工事技術も進みましたから、遺跡が壊されることは当時ほどはありません。まさに開発と歴史遺産が共存しています。当時の技術ならしかたありませんが、いま思うと、「あの遺跡がいま調べられれば、かゆいところに手が届くのかな」といった思いをするところも少なくありません。

聞き手・どうもありがとうございます。それでは最後に、ひと言お願いします。

考古学者・発掘調査という仕事は、今も昔も縁の下のような力持ちというところでしょうか……。
(この話はフィクションであり、一九九六年以降の記述・データは架空のものです。)



出てきたものは、人間の手により接合し復元され、実測される。2030年の今でも、人間でしかできないことも多い。